



日本生態学会

No.20

2010年1月

ニュースレター

[目次]

男女共同参画学協会連絡会第7回シンポジウム参加報告..... 1

記事

- I. 次々期会長及び次期全国委員選挙の結果について 4
- II. 全国委員会承認事項 4
- III. 書評依頼図書 4
- IV. 寄贈図書 5
- V. 後援・協賛 5
- VI. 地区会報告 5

お知らせ

- 1. 第30回（2010年）関東地区生態学関係修士論文発表会開催のお知らせ 12

書評 13

京都大学生態学研究センターニュース 15

男女共同参画学協会連絡会第7回シンポジウム参加報告

将来計画専門委員会

男女共同参画学協会連絡会（以下「連絡会」と略記、<http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/>）主催の第7回シンポジウムが、2009年10月7日（水）に東京工業大学蔵前会館で開催された。日本生態学会からは、半場佑子（常任委員兼将来計画副委員長）と可知直毅（将来計画専門委員長）、の2名が参加した。

今回のシンポジウムのテーマは「持続可能社会と男女共同参画」である。このテーマのキーワードは、ワークライフバランス（WLB）であることを強く印象づけたシンポジウムであった。女性研究者の割合を積極的に増やそうと制度化すると、女性優遇との批判をうけることもあるが、WLBは男女共通の問題としてまさに男女が共同してとりくめる課題であろう。とはいうものの、生産的なWLBの実現にむけて、個人的にも適切なWLBがとれていない生活を続けていることを自覚しつつ、研究者にとって大きな意識変革が求められるであろうことを痛感する。今後、子育て世代の若手研究者が指導力を発揮されることを期待したい。

連絡会は2002年10月に自然科学系の学協会が連携して発足し、2009年10月現在39の学協会が正式加盟し、30の学協会がオブザーバーとして参加している。これらの学協会に所属する会員の総数は約42万人、そのうち女性会員は約2万人（5%）である。日本生態学会は2003年に連絡会に加盟した。日本森林学会、日本進化学会、日本動物学会、種生物学会も正式加盟学会である。

以下、午前中の2つの分科会と午後の全体会について報告する。なお、シンポジウムの詳細な報告は、上記連絡会のウェブサイトに掲載される予定である。（報告者：可知直毅）

分科会 A 「学協会での男女共同参画のとりくみ」

日本化学会の森義仁氏の司会により日本建築学会、日本獣医学会、電子通信情報学会の取り組みについて紹介された。建築学会では、2007年に男女共同参画推進委員会が設置され、「男女共同参画推進行動計画」に基づいて活動している。第一に研究に携わる男女が平等にその能力が発揮できる条件を整えること。第二に建築界独特の働き方の中でワークライフバランスを浸透させることをめざしている。獣医学会は会員数3700名、女性比率18%と生態学会と近い規模・女性比率の学会である。獣医関係大学の卒業生の50%は女性であるが、学会に参加する割合は低い。これは多くの女性卒業生が動物病院に勤務し学会から離れてしまうためという説明であった。電子情報通信学会は女性比率は3%と低く、学生も少なく少数派で孤立しがちである。そこで、女性研究者のロールモデルを紹介するなどの活動を行っている。一部の女性会員や若手会員に負担が集中しないかと質問したところ、シニア会員と若手・女性会員とでペアを組むなどの工夫をしているとのことであった。また、学会の大会ではどうしても学術的な集会に人が集中するので、

昼休みにランチオンセミナー（弁当を学会が支給）を実施すると効果的との意見があった。（報告者：可知直毅）

分科会 B 「若手研究者と異分野交流のネットワーク作り」

この分科会では、若手研究者の問題、特に任期付き研究者に関する問題について、様々な分野から意見を出し合い任期付き研究者に関する問題の解決策を探ることをテーマに、コーディネーターの光武亜次理氏（お茶の水女子大）によりすすめられた。学術振興会 RPD 研究員の小柴一竹内和子氏、さきがけ研究員の渡邊恵里子氏、物理学会でポスドクアンケートを実施した中野享香氏による話題提供があった。

小柴一竹内和子氏（和洋女子大学）からは、非常勤というポストは保育園入園のときに不利になる、また努力が正当に評価されるのか、また評価が公平に行なわれているのかといったさまざまな不安をかかえており、学生には研究者への道をすすめられないと訴えられていた。一方渡邊恵里子氏（さきがけ専任研究員）は、光情報という研究に魅せられて学部3年より研究者の道をめざし、現在は研究のみならず会社を設立されるなど高いアクティビティーをもって活躍されているとの紹介があった。中野享香氏（新潟大）からは、任期付の職の実態とその問題点について問題提起がなされた。

質疑応答では、「評価」をめぐるポスドクと採用側との間に意識のずれがあるのではないかと指摘がなされた。例えば国研であれば、採用側としては研究業績や獲得資金の額だけではなく、行政からのニーズにあった対応ができるか、多くの人に研究を分かりやすく伝えられるか等を重視している、そのことをポスドクは十分に認識していないのではないかと意見であった。一方若手の側からは、現在の職場ではいわゆる「インパクトファクター」が全く考慮されない、一律で公平な評価システムを考えないといけないのではないかと指摘がなされた。「公平な評価」を若手は切望しているが、フロアからの指摘にもあったように、彼らが考えている「評価」の中身が偏っていて採用側（あるいは職場）と齟齬があるとの印象を受けた。若手の就職につながるような支援として、「採用側」が何を評価しているのかを情報提供する必要があると思われた。（報告者：半場佑子）

全体会議

午後の全体会議では、まず男女共同参画に先駆的にとりくんできた応用物理学会の小館香椎子氏による、男女共同参画学協会連絡会の過去6年間の歩みと今後を展望する特別講演があった。連絡会がとりくむべき課題として、異分野ネットワーク、女性研究者の発掘とリーダーの育成、海外の学協会とのネットワーク構築、若手研究者が研究者として自立するためのネットワーク構築、男性研究者の参加促進がある。応用物理学会は、将来ビジョンロードマップ（2008）のひとつとして人材育成を掲

げている。男女共同参画は、人材育成の一環として位置づけるべきであるという意見に納得した。また、大型のプロジェクト研究の代表者に女性が少ないこともデータに基づいて紹介された。

全体会議の後半では「持続可能社会に向けての女性研究者・技術者への期待」をテーマとして以下の4つの講演があった。

企業における女性の活躍支援 岩田喜美枝氏（株式会社資生堂 代表取締役社長）

「女性の活躍が不十分であることは人材の大きな無駄遣いである」という言葉で講演は始められた。個別企業としては人材の完全活用とダイバーシティマネジメントのため、産業界としては労働人口の確保、グローバル企業としての競争力強化のために女性支援が必要であり、女性が少ないことは日本企業の弱点であると説明された。実際、管理職の女性比率が大きい企業ほど業績が良く、男女間勤務年数の差が小さい企業ほど利益率が高いという、説得力の高いデータを紹介された。

資生堂では、女性支援を人事部が人事マターとして取り組むのではなく、取締役会の直轄組織としてCSR委員会を置き、先進的な取り組みを行っているという。例えば汐留に設置された託児施設「カンガルーム」は地域にも貢献し、資生堂の女性支援活動のシンボルとなっている。また、「アクションプラン15」では風土醸成、リーダー育成、働き方の見直し、仕事と育児の両立支援を重点課題とし、15の取り組みを進めている。その結果、現在では出産育児を理由に仕事をやめる社員はほとんどなくなったという。

しかし、現状は女性が仕事と子育てをかりょうじて両立できる状態（第二ステップ）にすぎず、目指すべきは男女ともに子供を育てながらしっかりキャリアアップできる状態（第三ステップ）であると述べられた。女性支援策は拡充されればされるほど女性ばかりがそれを利用するため、ますます女性はキャリアアップが遅れるという自己矛盾を抱えている。男性の長時間労働をやめさせ、すべての社員にワークライフバランスを実現することが大事であり、仕事に優先順位をつけ、仕事を減らし、簡素化するといった業務改革の必要性を強調された。

資生堂は、指導的役割を担う女性研究者を支援するためのサイエンスグラントを提供している。サイエンスグラントについては、とくに用途制限はなく雇用にも使えるので、使いやすい助成金である。こういった活動は「美しい生活文化の創造」という企業理念を実現するための社会貢献である。最後に、「一瞬も一生も美しく」という資生堂らしいフレーズで岩田氏の講演は締めくくられた。

講演ののち会場から、第三ステップへ進むための具体策は何かという質問に対し、部門の責任者に「魅力ある人づくり計画書」と題してWLB（ワークライフバランス）を推進するための計画書を提出させ管理職の業績評価にこうした業務見直しへの取り組み実績を加えるなどの工夫を凝らしていると答えられた。いわゆる退社時間を守りましょうといった「時短」だけでは決して長続きせず、

仕事の量を減らしたりプロセスを簡素化することが必要である、しかし資生堂でもなかなかうまくいっておらず道半ばである、他の方策を探っていく必要もあるかもしれない、とのことであった。

IHIにおける女性技術者の現状 高木朋子氏（株式会社IHI 原子力事業部エネルギーシステム部 主査）

ご自身の経歴の紹介から講演を始められた。最初に入社されたアネルバから、ご自身の関与された技術を移転するためにIHIへ転職された。そこでは会社の方針として人材のダイバーシティが謳われており、技術系社員の女性は10%いたそうだ。ただ、2年前に管理職になった時、約1900人の管理職のうち女性はわずか1.4%だったという。しかし、ご自身は今のところ女性であるということで差別されている感触を全く持っておらず、特に不満は感じていないという。持続的に女性が働くための会社の取り組みとして、育児支援制度はもちろんのこと、自己申告制度や育児者のための昇進基準などがあり、毎年、制度は充実を続けているという。ただ、制度を利用しやすい雰囲気、周囲の理解と協力が重要であることを付け加えられた。

これまでの経験から思うこととして、女性が活躍するためには環境が大事であるが、それを作るのも自分であるということ強調された。会社に積極的に改善提案を出すことが大事だということ。そして、これまで先輩に支えられてきた自らがまた、後輩に対して良い先輩になりたいという言葉で講演を締めくくられた。

講演の後、会社の支援制度を利用するに当たっての周囲の理解はどうかという質問に対し、人事部長が女性であり、女性のリクルートにも力を入れており、会社として女性の働きやすさをアピールしている、実際これまで自分が女性であるからどうということ考えたことはなく、極めて働きやすい環境であると答えられた。

女性研究者が企業内研究所で働き続けるために 高橋和枝氏（日本電信電話株式会社NTT環境エネルギー研究所 主任研究員）

6つの「良くある質問」を提示することで講演を始められた。その答えは講演の最後に示された。高橋氏の専門は高分子結晶の分子設計、合成と薄膜素子化であり、現在は電話のライフサイクルアセスメント、携帯電話のリサイクル、夜間衛星光を使った埋蔵資源解析などに従事されている。ご自身の経歴において、学位をいつとるかということが大きな問題であったようだ。女性には、子供を産む前に学位をとるか、子供を育ててから学位をとるか、という悩みがある。ご自身は子育てにめどをついた2007年に東京大学大学院に社会人入学されている。

NTTでは、通称使用（旧姓を名乗ること）が許されているそうだ。通称使用には公的証明との不整合、新しい姓に慣れるのが遅れる、などのデメリットがあるが、論文著者名の継続性、お客様対応、プライベートの保護、アイデンティティの保護、などのメリットがある。そのほか高橋氏がこれまで利用した制度には、つわり休暇、保育園への送り迎えサービス、看護休暇、学童保育児の

迎え支援サービスなどがあるそうだ。小学校での子供の学童保育の時間が早いことについては、育児支援サービスを利用しているなど、会社の支援制度はかなり充実しているようだ。また、鍵っ子にならざるをえない子供の安全のためには、近所のネットワークが大事だと話された。

最後に、講演の冒頭で提起された「6つの良くある質問」に対する回答を示された。「ガラスの天井あるか？」あるだろう。「結婚はキャリアに支障になるか？」それはない。「出産育児は支障になるか？」支障にはなるが、それは覚悟の上である。「小一の壁はあるか？」それはやはりある。「企業と大学はどっちが楽か」どっちもどっちである。企業の方が制度は充実しているが、今は大学も良くなったのではないか。「女性は結局損か？」これはNO。気長に信念を持ち続ければ道は開ける。そして、ご自身がかつてお母様から受けた言葉に関するエピソードをご披露され、人生において多少時間をロスすることがあっても、「それだけ長生きすればよい」くらいの気持ちになればよいのだという、深いイ話で講演を締めくくられた。

三井化学におけるキャリア開発支援 田中千穂氏（株式会社三井化学人事・労制部 女性社員登用推進チームリーダー）

三井化学には総合職で1割、管理職で1割の女性がいて、男女の年齢差はないという。これは「人の三井」というスローガンのもと、会社と社員はウィンウィン関係にあるべきだ、WLB（ワークライフバランス）はマストであるという考えが会社にあるためだそうだ。社長トップダウンの「女性社員登用推進チーム」が置かれ、多様性を積極的に生かす風土の醸成、キャリア支援、Face to Face ネットワーク構築、WLB 支援などを進めている。たとえば「座談会 with 社外取締役」といった交流会を開いたり、ロールモデル提示などを行っており、これらの取り組みには社内報レポートを最大限に活用している。2008年には厚生労働省のWLB推進プロジェクトに参画し、たとえば男性の育休取得促進を進めている。2005年、2008年に一人ずつであった男性育休取得者は、2009年には21名になったという。三井化学では専業主婦の夫も育休をとれるとのこと。また、社会活動休暇という制度もあり、2009年には200名の取得者がいた。社の保育園では融通のきく保育を行っているそうである。

女性の管理職登用には数値目標を定めているという。2006年には63名であった管理職が2009年には107名に増えた。ただし、あらゆる部門に女性管理職をとという方針であったために、技術・研究職から人事部などの事業部に女性が抜擢されるといった現象も生じている一方、研究所の女性管理職は増えていないという現状があり、各部門のバランスを見ながら進めることが今後の課題であるそうだ。

講演のあと、理工系女性が人事部長を務めるメリットについて質問があった。欧米では人事部長に女性が多いが、その理由は女性のコミュニケーション能力が高いと

考えられていること、リストラに際して割り切った考え方ができることなどが挙げられるのではないかと、また、理系の人間はロジカルシンキングが得意で、話が通りやすく、スムーズに物事を展開する能力にたけているのではないかと答えられた。（報告者：半場佑子・可知直毅）

各種報告

シンポジウムを運営した幹事学会の電子情報通信学会の荒川薫氏より、今回のシンポジウムの参加者は約150名であったこと、連絡会として、第二回大規模アンケートの報告書作成、アンケート結果を利用する際の規約の策定、提言委員会の発足、関係大臣への要望書持参を行ったことなどの報告がなされた。また、2009年度「女子中高生夏休みの学校：科学・技術者のたまごたちへ」について報告があった。なお、生態学会は、夏の学校で実施された「実験・実習」のうち唯一の野外実習として「野鳥の森自然観察」を担当した。

次期（第8期）連絡会幹事学会の高分子学会から挨拶があり、結婚・退職などのため退会した会員が再度入会する際に会費を半額にする再チャレンジ会員制度をはじめたことが紹介された。（報告者：可知直毅）

記 事

I. 次々期会長及び次期全国委員選挙の結果について

2009年12月10日に投票を締め切り、12月17日、日本生態学会事務局において開票を行った結果、次々期会長および第15期全国委員は下記のように決定いたしました。

なお任期は、会長が2012年1月1日から2013年12月31日、全国委員が2010年1月1日から2011年12月31日までのそれぞれ2年間です。

日本生態学会選挙管理委員会
委員長 酒井 章子

1. 次々期会長 投票数 433 票 (内有効投票数 417 票)

選出	松田 裕之	105 票
次点	可知 直毅	84 票
	甲山 隆司	70 票
	齊藤 隆	57 票
	嶋田 正和	49 票
	その他 43 名 (合計)	52 票

2. 全国委員

全国選出

順位	氏名	所属地区	票数
1	齊藤 隆	(北海道)	57
2	嶋田 正和	(関東)	41
3	占部 城太郎	(東北)	37
4	甲山 隆司	(北海道)	34
5	河田 雅圭	(東北)	32
6	仲岡 雅裕	(北海道)	30
6	宮下 直	(関東)	30
6	湯本 貴和	(近畿)	30
9	伊藤 哲	(九州)	28
10	可知 直毅	(関東)	27
10	工藤 岳	(北海道)	27
10	酒井 章子	(近畿)	27
13	佐竹 暁子	(北海道)	25
14	高村 典子	(関東)	25
15	辻 和希	(九州)	24
次点	加藤 真	(近畿)	24

地区選出 (氏名・票数)

北海道	工藤岳 12、綿貫豊 7、高田壮則 7 (次点)
東 北	占部城太郎 8、松木佐和子 4、杉田久志 4 (次点)
関 東	宮下直 18、吉田丈人 12、正木隆 12 (次点)
中 部	津田智 9、佐藤利幸 7 (次点)
近 畿	酒井章子 15、工藤洋 9、加藤真 9 (次点)
中四国	鎌田磨人 16、國井秀伸 10 (次点)
九 州	辻和希 9、相場慎一郎 7、山本智子 6 (次点)、伊澤雅子 6、矢原徹一 6、萩原秋男 6

選挙細則第7条1により同票の場合は年少者優先、また第7条2により同一人が全国・地方区の両方で選出された場合、全国選出を優先するため地区選出委員は下線

の方々になりました。

3. 地区別会員数・投票者数及び投票率

	会員数	投票者数	投票率(%)
北海道	396	40	10.1
東 北	252	25	9.9
関 東	1435	125	8.7
中 部	548	50	9.1
近 畿	716	92	12.8
中四国	313	39	12.4
九 州	336	47	13.9
全 国	3996	433	10.8

II. 全国委員会承認事項

1. 選挙管理委員

井鷲 裕司 (京都大学)
酒井 章子 (総合地球環境学研究所)
日野 輝明 (森林総合研究所)

2. 学会賞受賞者の決定

第8回日本生態学会賞

重定 南奈子 (同志社大学文化情報学部)
寺島 一郎 (東京大学理学系研究科)

第3回日本生態学会大島賞

該当者なし

第15回日本生態学会宮地賞

土居 秀之 (Carl-von-Ossietzky University Oldenburg)

東樹 宏和 (産業技術総合研究所ゲノムファクトリー研究部門)

細川 貴弘 (産業技術総合研究所ゲノムファクトリー研究部門)

III. 書評依頼図書 (2009年6月～2009年11月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局 (office@mail.esj.ne.jp) までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

- 藤崎憲治・西田律夫・佐久間正幸編「昆虫科学が開く未来」(2009) 582pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-87698-775-7
- 西野麻知子編著「とりもどせ! 琵琶湖・淀川の原風景—水辺の生物多様性保全に向けて—」(2009) 300pp. サンライズ出版株式会社 ISBN:978-4-88325-352-4
- 柴田毅式・日野輝明編著「大台ヶ原の自然史 森の中のシカをめぐる生物間相互作用」(2009) 302pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-01830-8
- 倉谷うらら著「フジツボ 魅惑の足まねき」(2009) 122pp. 岩波書店 ISBN:978-4-00-007499-5
- 青木人志著「日本の動物法」(2009) 274pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-063330-7

6. 大路樹生著「フィールド古生物学」(2009) 158pp. 東京大学出版会 ISBN: 978-4-13-062715-3
7. 日本土壤肥料学会編「土壌の原生生物・線虫群集」(2009) 174pp. 博友社 ISBN: 978-4-8268-0212-3
8. 速水格著「古生物学」(2009) 216pp. 東京大学出版会 ISBN: 978-4-13-062716-0
9. 樋口広芳・黒沢令子編著「鳥の自然史【空間分布をめぐって】」(2009) 258pp. 北海道大学出版会 ISBN: 978-4-8329-8191-1
10. 大井徹著「ツキノワグマ」(2009) 248pp. 東海大学出版会 ISBN: 978-4-486-01854-4
11. 宮内泰介著「半栽培の環境社会学 これからの人と自然」(2009) 262pp. 昭和堂 ISBN: 978-4-8122-0934-9
12. 池谷和信編「地球環境史からの問い」(2009) 367pp. 岩波書店 ISBN: 978-4-00-023856-4
13. 大串隆之・近藤倫生・難波利幸編「群集生態学シリーズ3 生物間ネットワークを紐とく」(2009) 332pp. 京都大学学術出版会 ISBN: 978-4-87698-345-2
14. 小野展嗣編「動物学ラテン語辞典」(2009) 810pp. ぎょうせい ISBN: 978-4-324-08802-9
15. 豊国秀夫編「復刻・拡大版 植物学ラテン語辞典」(2009) 388pp. ぎょうせい ISBN: 978-4-324-08862-3
16. 鬼頭秀一・福永真弓編「環境倫理学」(2009) 290pp. 東京大学出版会 ISBN: 978-4-13-062311-7

IV. 寄贈図書

1. 「食と緑の科学」(2009) 36pp. 千葉大学大学院園芸学研究所
2. 「多摩川 123号」(2009) 10pp. 財団法人とうきゅう環境浄化財団
3. 「ANNUAL REPORT 2008 第49回事業報告書 平成20年度」(2009) 144pp. 財団法人 東レ科学振興会
4. 「SESSILE ORGANISMS 第26巻2号」(2009) 122pp. 日本付着生物学会
5. 「うみうし通信 No.64, No.65」(2009) 12pp. 財団法人水産無脊椎動物研究所
6. 「日本学士院ニュースレター」(2009) 20pp. 日本学士院
7. 「財団法人下中記念財団2009年報」(2009) 64pp. 財団法人下中記念財団
8. 「財団法人鹿島学術振興財団 第33回 2008年度年報」(2009) 394pp. 財団法人鹿島学術振興財団
9. 「日本植物生理学会50年の流れ」(2009) 132pp. 日本植物生理学会運営委員会
10. 「多摩川 124号」(2009) 10pp. 財団法人とうきゅう環境浄化財団

V. 後援・協賛

日本生態学会では、下記のシンポジウム・セミナーを後援・協賛しました。

1. 「京都賞」受賞記念東京講演

期日：平成21年11月16日

会場：東京大学理学部2号館講堂

2. 国際生物多様性年記念サステイナビリティ学連携研究機構 (IR3S) 国際シンポジウム「生物多様性とサステイナビリティー自然と調和した社会をつくる」
日時：平成22年2月27日(土)
場所：東京大学安田講堂

VI. 地区会報告

北海道地区会

2011年3月に開催される日本生態学会第58回大会(札幌)の第1回実行委員会が10月22日(木)午後1時30分から午後4時まで北海道大学低温科学研究所、2階会議室で開かれた。

出席者：原登志彦、齊藤隆、隅田明洋、久保拓弥、工藤岳、小野清美、福井学、西川洋子、宇野裕之

欠席者：仲岡雅裕、大原雅、佐竹暁子

- (1) 実行委員会のメンバーと役割分担を確認した

会長：原登志彦(北大低温研)

運営&受付：齊藤隆(北大FSC)

公開講演：仲岡雅裕(北大FSC)

シンポジウム：隅田明洋(北大低温研)

発表編成：久保拓弥(北大地球環境)

ポスター発表：工藤岳(北大地球環境)

会場：小野清美(北大低温研)

会計：福井学(北大低温研)

高校生の発表：大原雅(北大地球環境)

託児：西川洋子(道環境研)

懇親会：宇野裕之(道環境研)

アルバイト：佐竹暁子(北大地球環境)

上のメンバーは各パートの責任者となり、必要に応じて各パートを拡充することになった。

- (2) 以下の日程と会場を確認した

<日本生態学会第58回大会(札幌)>

期間：2011年3月8日(火)～12日(土)

場所：札幌コンベンションセンター

- (3) 公開講演会の科研費申請

札幌大会公開講演会の課題を仲岡案(仮題「生態系を広く長く研究する」とする。科研費の申請書類の作成は仲岡氏に一任する。申請書は11月6日(金)までに生態学会事務局に送る(メール添付)。公開講演会を盛り上げるために関連イベント(高校生のポスター発表、自然保護活動の紹介ブースなど)を工夫する。

- (4) 委託業者の選定

札幌大会では受付業務の一部(主に参加費の徴収と管理)を業者に委託する。業者の選定方法は以下の通りにする。

- 1) 説明会：委託業務の内容を業者(6社を予定)に説明する。説明は原・齊藤が主に対応するが、できるだけ多くの委員が参加することとする。説明会は11月30日に開催する。場所は北大低温研。
- 2) 説明会の内容に応じて、業者から業務内容と見積

もりを提示してもらう。

- 3) 業者提案を実行委員会で審査して、委託業者を決定する。可能ならば第2回実行委員会(12月21日の週で調整中)で決定したい(無理ならば2、3社に絞り込む)。

また、委託業務は受付業務に限らず、より広い範囲の提案を要望する。

(5) 予算の概要

予算の叩き台が提案された。国際会議場を使った直近の大会である福岡大会を参考に予算計画を立てることになった。東京大会の参加者数、要旨購入数などを参考に収支計画を立てる。参加費は来年5月くらいに原案を作り、7月に配布されるニュースレターに間に合うようにする。

東北地区会

(1) 東北地区会第53回大会を開催

開催日:2008年11月8・9日

会場:弘前大学

シンポジウム(11月8日)

「流域の自然再生を考える」(応用生態工学会との共同開催)

趣旨説明:東信行(弘前大学農学生命科学部)

基調講演:「流域の自然再生を考える」

中村太士(北海道大学大学院農学研究科)

研究・事例発表

I. 県民の視点から

- ①「住民の記憶に基づいた木野部海岸の磯再生」角本孝夫(NPO法人SCR)
- ②「仏沼のこれまでと現状そして未来」古川博(NPO法人おせっからんど)、高橋雅雄(立教大学大学院)
- ③「青森のメダカ保全指向ピオトープ〜メダカ郷国とあずましの水辺」工藤敦士(弘前大学大学院)

II. 遺伝的な視点から

- ④「河川水生昆虫の遺伝的多様性からみた自然環境の保全と再生」渡辺幸三(東北大学大学院)

III. コンサルタントの視点から

- ⑤「蕪栗沼遊水地の湿地再生から10年」香川裕之(東北緑化環境保全(株))
- ⑥「指定浜頓別クッチャロ湖鳥獣保護区における保全事業に向けて」浜田拓((株)地域環境計画)

一般講演(11月9日)

「マイクロサテライトマーカーを利用した岩木川河口域ヨシ群落のクローン構造の解析」*飯田浩・杉山修一(弘前大学農学生命科学部)

「アカエゾマツ孤立個体群の繁殖システム:近交弱勢と繁殖成功パターンに着目して」*富田基史・陶山佳久(東北大)・関剛・杉山久志(森林総研)

「仙台平野北部・平筒沼いこいの森の温帯混交林とイヌブナ小林分」*平吹喜彦¹・金子真也¹・菅野洋²・大柳雄彦²(¹東北学院大学教養学部、²(株)宮城環境保全研究所)

「北上山地のブナ林における落葉落枝量の推定」*櫻井悠・中野洋亮・竹原明秀(岩手大学人文社会科学部)

「落葉広葉樹数種の実生定着におけるジャンゼン・コンネル効果」*上野真郷・山崎実希・清和研二(東北大学大学院農学研究科)

「サワグルミにおける種子の水散布と実生定着の関係」*五十嵐知宏・上野直人・清和研二(東北大学大学院農学研究科)

「トチノキ種子に含まれる二次代謝物質がアカネズミによる貯食型散布に与える影響」*増谷優・星崎和彦・吉澤結子(秋田県立大・生物資源)

「青森県十三湖におけるヤマトシジミ(*Corbicula japonica*)の個体群維持機構」*原拓也¹・山崎瞳¹・小山裕起²・出村国光²・細川泰史³・笠井亮秀³・長崎勝康⁴・和田実⁵・東信行¹(¹弘前大学大学院農学生命科学研究科・²弘前大学農学生命科学部・³京都大学農学研究科・⁴青森県水産総合研究センター内水面研究所・⁵長崎大学大学院生産科学研究科)

「耳石 Sr/Ca 比分析によって見えたミミズハゼの日和見的な回遊」*三浦太智¹・山田裕之¹・大竹二雄²・東信行¹(¹弘前大学大学院農学生命科学部・²東京大学海洋研究所)

(2) 地区委員会

2008年度定例地区委員会は、2008年11月9日に弘前大学において開催され、以下の議題について報告および審議がなされた。出席者は以下の11名であった。東信行、佐原雄二、杉山修一、星崎和彦、牧陽之助、竹原明秀、占部城太郎、清和研二、彦坂幸毅、平吹喜彦、黒沢高秀。

○報告事項

・庶務報告(2008年1月1日~2008年11月9日)

- 1) 2008年1月:生態学会自然保護専門委員に竹原明秀氏・鈴木孝男氏を再選した。
- 2) 2008年5月:関剛地区委員が転出したが細則に従い欠員とした。
- 3) 2008年6月:地区会会報第68号を発行、発送した。
- 4) 2008年7-10月:地区委員選挙(選挙管理委員:鈴木孝男氏・鹿野秀一氏)の結果以下の22名が選出された(任期:2008年8月1日~2010年7月31日、以下敬称略)。

青森県:東信行、佐原雄二、杉山修一(次点 武田哲) 岩手県:牧陽之助、竹原明秀、杉山久志、由井正敏(次点 鈴木まほろ)

宮城県:占部城太郎、中静透、清和研二、彦坂幸毅、陶山佳久、酒井聡樹、河田雅圭、平吹喜彦(次点 太田宏)

秋田県:蒔田明史、星崎和彦(次点 成田寛二) 山形県:林田光祐、玉手英利、横山潤(次点 小山浩正) 福島県:黒沢高秀、木村勝彦(次点 浅見和弘)

- 5) 2008年9-10月:地区委員互選で地区委員長に清和研二氏(東北大)が選出され、また庶務幹事に陶山佳久氏、会計幹事に小山浩正氏が地区委員長により委嘱された。

6) 2008年10月 第53回地区大会および総会の案内を発送した。

7) 2008年11月 弘前大学において第53回地区大会および地区委員会を開催した。大会は応用生態工学

会との共同開催とした。

- ・会計報告
2007年度決算報告とその会計監査報告、2008年度中間報告ならびに今後の執行見込みについて報告があり、了承された。
- ・その他
2009年全国大会開催について 牧陽之助大会準備委員長から、会場（岩手県立大）の準備状況や準備委員会における役割分担などの詳細について報告があった。
- 審議事項
- ・2009年度予算
2009年度予算案について説明があり、了承された。
- ・次回・次々回大会について
次回地区大会を宮城県で行うことが報告された。
次々回地区大会は、順序では岩手県だが、2009年に全国大会が開催されるため、地区大会の開催をスキップすることが既に了承されており、秋田県での開催の了承を得た。
- ・2009年全国大会について
全国大会の準備に地区会ができるだけ後押しすることを確認した。

(3) 総会

- 2008年度東北地区総会は、2008年11月9日に開催され、総会議長に東信行氏を選出し、以下の議題について報告および審議がなされた。
- ・地区委員会における庶務報告・会計報告が了承された。
 - ・2009年度予算案が原案の通り承認された。
 - ・次回地区大会を宮城県で開催することが承認された。

関東地区会

2009年（1月～12月）活動報告

- (1) 2009年1月10日（土）に地区会総会を首都大学東京秋葉原サテライトキャンパスにて開催した。参加者10名。

報告：会員動向、2007年および2008年の活動報告、2007年および2008年の会計報告

議事：2007年度決算および2008年度決算、2009年予算・活動計画の承認、地区会の将来計画

- (2) 2009年1月10日（土）に公開シンポジウムを首都大学東京秋葉原サテライトキャンパスにて開催した（共催：首都大学東京）。参加者73名。

テーマ：遺伝資源の宝庫としての小笠原諸島

「小笠原の陸産貝類の形態的多様性と遺伝的多様性」千葉聡（東北大・生命科学）

「小笠原土着のオガサワラトカゲと外来のグリーンアノールの集団遺伝構造」林文男・鈴木惟司（首都大・生命科学）

「小笠原固有樹種ムニンフトモモの遺伝的多様性と遺伝構造」兼子伸吾（京大・生森林科学）

「小笠原固有植物群の集団遺伝的解析」加藤朗子（首都大・牧野標本館）

ポスター発表

「特定外来生物ニューギニアヤリガタリクウズムシの

耐塩水性～陸産貝類との比較～」大林隆司（首都大）・杉浦真治（森林総研）・岩淵喜久男（農工大）・可知直毅（首都大）

「小笠原諸島のワラジムシ亜目の種多様性と群集組成への捕食者オオヒキガエルの影響」八巻明香（横浜国大・環境情報）・岸本年郎（自然研）・長谷川元洋（森林総研・木曾）・菊池知彦（横浜国大・環境情報）

「メグロの遺伝的、形態的島嶼間変異」川上和人（森林総研）・原田幸子、鈴木惟司（首都大）・樋口広芳（東大）

「小笠原諸島固有のトンボ類の系統と集団遺伝構造」苅部治紀（神奈川県博）・林文男（首都大）

「外来木本種モクマオウが小笠原固有の木本種の定着に及ぼす影響」畑憲治・加藤英寿・可知直毅（首都大・生命）

「琉球由来のセンダンが小笠原諸島自生のセンダンに引き起こす遺伝的攪乱の可能性」須貝杏子・村上哲明・加藤英寿（首都大・牧野標本館）

「マイクロサテライトマーカーを用いた小笠原諸島固有樹種オガサワラビロウにおける遺伝構造の推定」大谷雅人（森林総研）・谷尚樹（国際農林水産業研究センター）・吉丸博志（森林総研）

「小笠原諸島における絶滅危惧種オガサワラグワの遺伝構造と保全」吉丸博志（森林総研）・谷尚樹（国際農林水産業研究センター）・河原孝行（森林総研・北海道）

「オガサワラグワの倍数性分析」板鼻直栄（森林総研）特別展示

「奇跡の島・南硫黄島～25年ぶり学術調査の記録」NPO小笠原自然文化研究所・南硫黄島調査隊

ビデオ上映 秘境南硫黄島～25年ぶりの上陸調査～

- (3) 2009年2月に地区会報第57号を発行した。
- (4) 2009年3月7日（土）に29回修士論文発表会を明治大学生田校舎にて開催した。

A会場

「谷津田に生息するクサガメ *Chinemys reevesii* の個体群特性—メスの繁殖生態と幼体の生態—」今津健志（明治大・農・応用植物生態）

「中国広東省での荒廃地修復過程における昆虫相の多様性回復評価」高木健太郎（早稲田大・人間科学・環境生態）

「伊豆諸島のハチ類相の生物地理学的解析」深澤悟（東邦大・理・地理生態）

「都市近郊林における樹洞木の分布特性と樹洞営巣性鳥獣類による樹洞利用」保母桂志（明治大・農・応用植物生態）

「DNAを用いたクモ類の糞からの餌生物同定法の検討」仲條竜太（東邦大・理・地理生態）

「亜熱帯ヒルギ林における飛翔性昆虫の群集構造」佐々木幹雄（筑波大・生命環境科学・保全生態）

「隠岐諸島西ノ島の放牧地におけるウシの行動と植生景観」小林由理亜（首都大・都市環境・環境地理）

「伊豆諸島の貧弱な送粉者相とクサギの花形態進化」水澤玲子（東邦大・理・地理生態）

「溪流棲落葉破碎食性昆虫の無機態リン放出者としての役割」佐藤竜一（東京大・農学生命科学・森林動物）
 「光合成細菌が優占する温泉微生物マットにおける水素発生と消費」大滝宏代（首都大・理工・環境微生物）
 「カザフスタン共和国ステップにおける群落特性に及ぼす土壌の諸性質の影響」黒川巧（筑波大学・生命環境）
 「生物的ならびに物理的環境要因に対する草原の土壌呼吸応答特性」鈴木あづさ（玉川大・農）
 「外部形態および集団遺伝学的解析からみた小笠原産タブノキ属植物の分化」常木静河（首都大・理工・植物系統分類）
 「藍藻毒合成酵素遺伝子をマーカーとした有毒藍藻類の新規分類法の開発」伊藤聡史（筑波大学大学院 生命環境科学研究科）
 「小笠原産ムラサキシキブ属の遺伝構造と集団分化の解明」森啓悟（首都大・理工・植物系統分類）

B 会場

「指標植物をもちいた関東地方周辺の里地里山評価」菅原のえみ（横浜国大・環境情報）
 「関東地方の扇状地の農業用水路における水生植物の分布と生育環境」鈴木晴美（東京農工大・植生管理）
 「北総台地の半自然草原における野草の保全に関する研究」大橋賢（明治大・農・応用植物生態）
 「大菩薩嶺夏緑広葉樹林における林冠構成種の実生の発芽・定着に対する地形の影響」芝朋美（東京農業大・森林生態）
 「北方針広混交林における樹木稚樹の成長に関わる環境要因」中馬美咲（東京大・農学生命科学・森林圏生態）
 「北アルプス北部、別山山頂付近における線状凹地の植生分布と環境要因」榎澤崇宏（明治大・文学）
 「絶滅危惧種チョウジソウ *Amsonia elliptica* の発芽特性と生育地の植生適合性」畑中由紀（横浜国立大・環境情報）
 「栃木県における特定外来生物オオハンゴンソウの分布に果たす景観配置とハビタット特性の役割」中村昌代（宇都宮大）
 「太平洋側山地におけるブナ属2種 (*Fagus crenata* と *F. japonica*) の実生定着過程と種特性の解明」石塚航（東京大・農学生命科学）
 「小笠原諸島固有木本植物オガサワラビロウの散布体の浮遊能力の種内変異」石神唯（首都大・理工・植物生態）
 「伊豆諸島における固有変種サクユリの分布特性と人為の影響」菊地哲理（明治大・農・応用植物生態）
 「太平洋側森林北限域におけるスダジイ実生の定着と成長」加部祐介（宇都宮大・雑草科学研究セ）
 「富士山南麓のブナ帯域におけるスズタケ (*Sasamorpha borealis*) の分布と地形・土壌との関係」岡田真樹（東京農工大・植生管理）
 「西表島におけるマングローブ樹木4種の葉の成熟に伴う形態と生理生態的特性の変化」原美穂子（東京農業大・森林生態）
 「常緑広葉樹稚樹のクロロフィル含量・窒素含量の時系列変化～フェノロジー・老化に伴った光合成関連物

質の変動～」水崎大二郎（千葉大・園芸学）

(5) 2009年11月7日に地区委員会および地区総会を首都大学東京国際交流会館にて開催した。参加地区委員6名。

報告：会員動向、2009年活動報告、2009年会計中間報告

審議：地区選出自然保護委員の再任、2010年活動計画と予算案、地区会の将来計画

総会で、2010年中に地区会のウェブサイトを開設し、会報のPDF版をダウンロードできるようにすることを報告した。また、次号の地区会報に今後冊子体での地区会報の送付希望を確認するための返信葉書を同梱することを報告した。

(6) 2009年11月7日にシンポジウムを首都大学東京国際交流会館にて開催した。参加者62名（女性18名、男性44名）。

テーマ：若手研究者が描く生態学の未来像

「はじめに」可知直毅（首都大・理工・植物生態）

「鳥の行動生態学的アプローチから」田中啓太（理研・脳科学セ）

「社会性昆虫の進化的アプローチから」土畑重人（東大・総合文化）

「共生微生物の進化的アプローチから」細川貴弘（産総研・生物共生進化）

「植物の系統地理学的アプローチから」岩崎貴也（首都大・牧野標本館）

「植物の歴史生態学的アプローチから」富松裕（東北大・複合生態フィールドセ）

「総合討論：20年後を想像できるか」林文男（首都大・理工・動物生態）

中部地区会

(1) 2008年度生態学会中部地区会を開催

開催日：2008年12月7日（日）

場 所：静岡大学

【総会】

1. 信州大学より静岡大学へ引き継ぎ
 2. 会計報告
 3. 中部地区会の委員として、会長に増沢武弘氏（静岡大学）庶務委員に小南陽亮氏（静岡大学）会計に澤田均氏（静岡大学）会計監査に小林克実氏（聖光学院）が推薦された
 4. 中部地区会の地理的特徴から、小規模の地域、地方地区、テーマ別研究発表の推進
 5. 小規模地区会への中部地区会からの援助
 6. 地区会のインフォメーション
- 以上の件について審議のうえ、了承された

【若手研究発表】

「八ヶ岳におけるコマクサ純群落の成立要因」梅沢芳（静岡大学・院・生物科学）

「富士山森林限界付近におけるイタドリ可塑性」伊藤理恵（静岡大学・院・生物科学）

「愛知県シダ植物の種密度と分布変遷」田中崇行・佐藤利幸（信州大学・院・工学）

「外来雑草ネズミムギの出芽深度と土壤攪乱－耕起農法と不耕起農法の比較」足立行徳・市原実・山下雅幸・澤田均（静岡大・農）

「千枚岳における豊富な Mn と特殊な植生との関連性」安部壮一（静岡大・理）

「ミミズ生息密度の季節変動と植生・土壌要因との関係－越年性ミミズの特性－」飯泉沙弥香（静岡大・教育）

「農地生態系のもたらす雑草種子捕食サービスの定量化」市原実・山下雅幸・澤田均（静岡大・農）

「温帯海岸林における陸ガニの種子散布」伊藤信一（静岡大・教育）

「富士山南側斜面におけるブナ群落の現状」伊藤大将（静岡大・理）

「富士山の森林限界－30 年間の変遷－」大石このみ（静岡大・理）

「イヌマキ果実と鳥類・哺乳類との相互作用」福田悦士・浅原裕介・小南陽亮（静岡大・教育）

「長野県のシダ植物種密度の分布様式の要因に関する考察」松浦亮介・佐藤利幸（信州大・理）

「外来雑種ネズミムギへのエンドファイト感染が種子食昆虫に及ぼす影響」丸山啓輔・市原実・山下雅幸・澤田均（静岡大・農）

「カール底に優占するタテヤマキンバイのフェノロジーと分布」富田美紀（静岡大・院・自然科学）

「カール底に優占するタテヤマキンバイの発芽・生育特性」青島佑太（静岡大・理）

「希少種の絶滅プロセスを解明－ハタバカンガレイ」北村孔志（静岡大・工）

「種の多様性の維持機構解明に関する数理解析」岩田繁英（静岡大・JSPS）

「東濃地方を中心としたヒメタイコウチのミトコンドリア DNA の 16S rRNA に認められたハプロタイプについて」中村早耶香（中部大・院）

「HSI モデルを用いたハルリンドウの遺伝的多様性保全のための環境要因評価」味岡ゆい（中部大・院）

「アカネズミの空間次元別 HSI モデルの比較検討」大畑直史（中部大・院）

「長野県松本盆地における放棄水田から水辺植生復元のための埋土種子評価」北川久美子（信州大・院）

「サドノウサギの生息地選択と分布」清水理恵（信州大・理）

(2) 2009 年度生態学会中部地区会を開催

開催日：2009 年 5 月 30 日（土）

場 所：長野県霧ヶ峰自然保護センター

【総会】

○報告事項

井田秀行氏（信州大学）より「根子岳風力発電計画に関わる要望書」について説明があり、地区会として要望書を提出することが承認された

【中部地区会公開シンポジウム】

「ニホンジカによる高山植生の変化－南アルプス・八ヶ岳・霧ヶ峰－」増沢武弘（静岡大学理学部）元島清人（中部森林管理局）

「霧ヶ峰におけるニホンジカのライトセンサス調査及

び植生影響調査について」岸元良輔・尾関雅章（長野県環境保全研究所）

「霧ヶ峰、南アルプスに生息するニホンジカの生態」泉山茂之（信州大学農学部）

「越冬場所におけるニホンジカの管理捕獲」竹田謙一（信州大学農学部）

近畿地区会

(1) 2009 年度第 1 回地区委員会の開催

日時：2009 年 6 月 20 日（土）

会場：奈良女子大学理学部

出席者：和田恵次、佐藤宏明、難波利幸、前迫ゆり、石田弘明、谷田一三、野間直彦、（事務局）堀、曾田、渡辺

議事：(1) 地区会ウェブページの開設 (<http://www.esj.ne.jp/kinki/>) (2) 自然保護関連の要望（大阪府信太山湿地）に関する報告と方針決定 (3) 今後の活動方針と 2008 年度会計報告と 2009 年度予算案の議論と承認 (4) 今期のフィールドシンポジウムと公募型シンポジウムの検討 (5) 2009 年度フィールドシンポジウム案の検討 (6) 次期地区委員会選挙について (7) 2012 年 3 月の生態学会大会開催について (8) 次期事務局について

(2) 2009 年度第 1 回例会の開催

日時：2009 年 6 月 20 日（土）

会場：奈良女子大学理学部

プログラム

第 7 回日本生態学会近畿地区会奨励賞授賞式（後藤龍太郎氏・鶴井香織氏）

【一般発表】

「空間構造を考慮した個体ベースモデルを用いた寄生関係に関する数理解析」皆藤千穂（奈良女大・人間文化）

「鳥類育児寄生者のホスト乗換え仮説に関する数理解析的研究」川添のぞみ（奈良女大・人間文化）

「ミョウガガイの矮雄間競争の実態」尾崎有紀（奈良女大院・人間文化）・岩口伸一（奈良女大・理）・渡辺勝敏（京大院・理）・遊佐陽一（奈良女大・理）

「塩分に対応した両生類の行動適応－個体の行動が種の生息範囲に影響する可能性－」原村隆司（京大・動物行動）

「魚食性魚類の捕食－被食関係に見られる左右性の影響」八杉公基・堀道雄（京大院・理）

「潮間帯カニ類 4 種の遺伝的集団構造の比較－生息場所特性の違いに着目して－」川根昌子・和田恵次（奈良女大学）・渡辺勝敏（京大院・理）

「チャルメルソウ節植物における花の匂いが介在した生殖隔離機構」岡本朋子（京大院・地球環境）・奥山雄大（国立科博）・後藤龍太郎（京大院・人間環境）・加藤真（京大院・地球環境）

「淀川のプラナリア相～外来種の侵入と分布拡大を中心に～」岡出朋子（大阪市立自然史博）

第 8 回日本生態学会近畿地区会奨励賞に、川添のぞみ

氏、八杉公基氏、岡本朋子氏の発表が選ばれた。

(3) 2009 年度第 1 回近畿地区会自然保護専門委員会の開催

日時：2009 年 7 月 24 日（金）

会場：京都大学総合人間学部

出席者：加藤真・中井克樹・野間直彦・渡辺勝敏・遊磨正秀・村上興正（～2008 年委員長）・岩崎敬二（2009 年度～委員長）

議事：(1) 委員の確認と追加案 (2) 委員長の変更案（後日承認済）(3) 淀川イタセンパラ要望書の取り扱い (4) 今後の活動課題について

(4) 2009 年度第 1 回フィールドシンポジウムの開催

テーマ：「芦生におけるシカ害とその対策研究の現状」

日時：2009 年 10 月 3 日（日）

会場：京都府南丹市美山町芦生 京都大学フィールド科学教育研究センター森林ステーション芦生研究林

内容：午前中に研究林事務所講堂において、高柳敦氏（「芦生の自然をシカの影響からどう保全するか」）、藤木大介氏（「大規模シカ柵を用いた集水域スケールでの植生回復試験」）、福島慶太郎氏（「シカによる下層植生の食害が森林生態系の物質循環に与える影響」）の講演。午後、バスで長治谷に移動、野田畑、ウツロ谷を含め 3 カ所の鹿よけネット設置区で、梶田学氏（鳥類生態学）を加えた講師陣による説明を聞きながら見学を行った。参加者：講師 4 名、公募 28 名、事務局 1 名の計 33 名。

(5) 2009 年度総会および第 2 回地区委員会・例会の開催（予定）

日時：2009 年 12 月 13 日（日）

会場：滋賀県立琵琶湖博物館

プログラム

地区委員会

総会

第 8 回日本生態学会近畿地区会奨励賞授賞式（川添のぞみ氏・八杉公基氏・岡本朋子氏）

一般発表

未定

中国四国地区会

(1) 第 53 回中国四国地区大会(2009 年 5 月 16、17 日、於：高知大学)

【ポスター発表】(5 月 16 日)

「移入植物アオモジの広島県における分布と生育状況について」○久保晴盛¹、長谷信二²、向井誠二³、坪田博美³（¹ 広島大学・理・生物科学、² 広島県呉市、³ 広島大・院・理・宮島自然植物実験所）

「岡山県におけるシリブカガシ林の分布と生育環境」○古屋達規¹、波田善夫²（¹ 岡山理科大学・総情・生地、² 岡山理科大学・総情・生地）

「徳島県高丸山ブナ林における林分構造の 8 年間の変化」○熱田尚子¹、鎌田磨人²（¹ 徳島大学工学部建設工学科、² 徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研

究部）

「鳥取県三徳山周辺におけるブナ林の下降と気象要因の解析」○永松大、中原歩美（鳥取大・地域・地域環境）

「世界遺産宮島で生じた崩壊地の植生回復に関する基礎研究」○坪田博美¹、向井誠二¹、黒田有寿茂²、長谷信二³、豊原源太郎¹、海堀正博⁴（¹ 広島大・院・理・宮島自然植物実験所、² 兵庫県立大・自然・環境科学研究所、³ 広島県呉市、⁴ 広島大・院・総合科学）

「協働に基づく自然林再生と順応的管理—「徳島県高丸山千年の森」における取り組み」○鎌田磨人¹、勝瀬真理子²、森一生³、花巻旬二⁴（¹ 徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部、² 徳島県高丸山千年の森ふれあい館、³ 徳島県農林水産総合技術支援センター森林林業研究所、⁴ 徳島大学工学部建設工学科）

「人工水路に定着した塩生植物の生育環境」○荒木悟¹、國井秀伸¹、陶山俊一²（¹ 島根大学汽水域研究センター、² 総合技研）

「ため池の水生物群落とその生育環境」○時光秀彰¹、波田善夫²（¹ 岡山理科大学・総合情報研究科・生物地球システム専攻、² 岡山理科大学・総合情報学部・生物地球システム学科）

「四国地域におけるカワウの繁殖コロニーの分布」○佐藤重穂¹、濱田哲暁²（¹ 森林総合研究所四国支所、² 東洋電化工業）

「超高压下におけるコケ（チジレゴケとヒナノハイゴケ）の極限耐性」○西平直美¹、小野文久²、森嘉久²、三枝誠行³、松島康³、山下雅道⁴（¹ 岡山一宮高校、² 岡山理科大学、³ 岡山大学、⁴ JAXA）

「温暖化環境下における樹木の成長の解析—オープントップチャンバー実験—」○賈磊、中根周歩（広島大学大学院生物圏科学研究科）

「温暖化環境下における森林の土壌呼吸解析—オープントップチャンバー実験—」○王新、中根周歩（広島大学大学院生物圏科学研究科）

「ペンクロス芝土壌への竹炭埋設が土壌温度、土壌水分に及ぼす効果」○皮玲、中根周歩（広島大学大学院生物圏科学研究科）

【口頭発表】(5 月 17 日)

「土佐湾の細砂底の貝類」山田ちはる¹、○伊谷行²、加藤真³、Vararin Vongpanich⁴、上田拓史⁵、木下泉⁵（¹ 高知大院黒潮、² 高知大教育、³ 京都大吉田、⁴ PMBC、⁵ 高知総研セ）

「高知県浦ノ内湾におけるミドリイガイの生息場所利用と水平分布」○山田ちはる¹、伊谷行²、上田拓史³（¹ 高知大学院黒潮圏海洋科学研究科、² 高知大学・教育学部、³ 高知大学・総合研究センター）

「高知県弘岡平野における水生植物の分布と環境要因との関連性」○山ノ内崇志、石川慎吾（高知大・院・総合）

「四国におけるブナ集団の遺伝的多様性」甲斐央浩、○原田光（愛媛大学・農学部・森林資源学）

「四国におけるツキノワグマの生息適地解析」○伊藤徹¹、金澤文吾²、石川慎吾¹（¹ 高知大学・院・総合、² NPO 法人四国自然史科学研究センター）

「世界文化遺産厳島神社後背林の保全と利用 3. 宮島の市街地に出てくるニホンシカの個体数変動調査」○林勝治¹、吉野由紀夫²、榊井秀雄¹、関太郎³ (¹ 鈴峯女子短大、² 東和環境科学、³ 廿日市市)

「岡山県南部の里山における葉リターが変形菌の種多様性に及ぼす影響」○高橋和成、波田善夫 (岡山理大院・総情・数理・環境システム)

「里山林の炭素動態に対する大型外来植物モウソウチクの侵入・分布拡大の影響」多田壮宏、宗本一平、山本新、新井里奈、○小林剛 (香川大学農学部)

「温暖化環境下における土壌呼吸速度の解析—野外温暖化実験を通して—」新川里美¹、○中根周歩¹、Naishen Liang² (¹ 広島大学総合科学部環境共生科学、² 国立環境研究所地球環境研究センター)

【高校生研究発表】(5月16日)

【公開シンポジウム】(5月16日)

虫たちと環境変動 (世話人: 原田哲夫)

「ミバエの場合—面白い昆虫行動の研究: 遺伝リンクと環境変化」宮竹貴久 (岡山大学大学院環境学研究科)

「アメンボの場合—温暖化で生活史はどのように変わったか?」原田哲夫 (高知大学人文社会科学系教育学部)

「アリの場合—環境の変化とアリ類の反応」頭山昌郁 (株式会社七幅顧問)

「コロロギの場合—一日リズムと季節への適応」富岡憲治 (岡山大学大学院自然科学研究科)

【総会】(5月17日)

a. 報告事項

庶務報告

地区会員の動向 (2009年4月末現在 313名、昨年度 - 15名)、会費納入率、活動報告

会計報告 2008年度会計

アフターケア委員会活動報告 (細見谷林道工事)

地区会ホームページ編集管理委員会報告

各種委員会報告

b. 承認事項

2008年度会計決算

2010年度合同支部大会開催地: 山口大学

c. 審議事項

2009年度会計予算

2011年度合同支部大会開催地: 香川

特別会計からの補助金支出の申請と承認

次期会長選挙の実施

その他 (地区会ホームページの編集)

(2) 地区会報 53号発行 (2009年7月)

九州地区会

(1) 2008年度地区委員会

2008年5月17日 (土) 大分大学旦野原キャンパス

地区委員: 岩本俊孝、江口和洋、高宮正之、佐藤仁蔵、山本智子 (順不同)

(2) 地区大会

第53回三学会九州支部・地区合同大会

会期: 2008年5月17日 (土) ~ 18日 (日)

会場: 大分大学旦野原キャンパス

【一般講演】

「テンを指標種とする森林の評価 I. 糞内容分析結果と餌植物分布図の作成」* 桑原佳子 (応用生態研)、荒井秋晴 (九歯大・総合教育)、足立高行 (応用生態研)、田悟和巳、中村匡聡、松村弘 (いであ株式会社)

「テンを指標種とする森林の評価 II. テンの行動圏」* 足立高行 (応用生態研)、荒井秋晴 (九歯大・総合教育)、桑原佳子 (応用生態研)、田悟和巳、中村匡聡、松村弘 (いであ株式会社)

「テンを指標種とする森林の評価 III. 糞による生息域および個体数の推定法」* 荒井秋晴 (九歯大・総合教育)、足立高行、桑原佳子 (応用生態研)、田悟和巳、中村匡聡、松村弘 (いであ株式会社)

「猪の瀬戸湿原における野焼き試験」* 足立高行、桑原佳子 (応用生態研)

「マングローブの一種オヒルギの遺伝的多様性と集団構造」* 斉木瑠美子、美濃部純子、小泉修、山崎常行 (福岡女子大学・人間環境)

「大分スポーツ公園における里山林の再生・法面植栽地10年間のモニタリング結果」* 須股博信 (大分市)

「非繁殖期におけるセアカオーストラリアムシクイの群れ構造」中村真央 (九大・理・生物)、* 江口和洋 (九大院・理・生物)、森さやか (東大・農学生命科学)

【高校生研究発表】

「ジョロウグモの研究~ジョロウグモの最適空間を探る~」* 宮成亮太、城内辰亨、古澤悠季、石井芹奈、八幡美絵子 (大分上野丘高校)

「九州におけるツクシテンツキ (絶滅危惧II類) の分布と生態的要因について」* 弘藏勝久、曾我俊裕、坂口翔平、芳野春介、宮迫駿也、岩切英子、船津勇一 (大分豊府高校)

「都市緑化~緑のカーテンのメカニズムをさぐる~」袖彰宏、* 森高亜弓、遠藤正都、山元詢也 (大分舞鶴高等学校)

「別府市・春木川における微生物について~ケイソウと温泉の関係を探る~」後藤優太、永井聡、岩男政志、甲斐逸平、* 山村駿太郎、亀田雅弘、甲斐愛、柴田桃子 (大分舞鶴高校)

「微生物による浄化作用」* 丸山理紗¹、岩本和仁¹、古畑あい¹、今村剛¹、孫卓煥¹、藤原秀彦² (¹ 大分舞鶴高校、² 別府大学食物バイオ学科)

(3) 地区例会

第462回 4月12日 (土) 熊本 (熊本大学理学部)

「ヤスデの交尾器と生殖隔離」田邊 力 (熊本大学教育学部)

第463回 5月24日 (土) 沖縄 (琉球大学)

「琉球のサンゴ礁とふたつの空間スケールの人為的攪乱: 地球規模と地域規模」酒井一彦 (琉球大学・熱帯生物圏研究センター)

第464回 7月5日 (土) 鹿児島 (鹿児島大学理学部)

「クラカタウ諸島のアリ・シロアリ相 125年にわたる移住の歴史」* 山根正気 (鹿児島大学理学部)・シヤウカニ (鹿児島大学理工学研究科)

第465回 11月8日(土) 佐賀(佐賀大学農学部)
「フタバシツチカメムシ卵保護行動と栄養卵産生」 稲富弘一(佐賀大・農)

第466回 11月29日(土) 宮崎(宮崎大学教育文化学部)

「宮崎県内のサンショウウオ類」 末吉豊文(宮崎県総合博物館)

第467回 11月15日(土) 熊本(熊本大学理学部)
「小笠原諸島における外来種問題と送粉系攪乱」 安部哲人(森林総研・九州)

第468回 12月6日(土) 福岡(九州大学農学部)
「メスの多回交尾の遺伝的変異と進化: アズキゾウムシを用いた実証研究」 原野智広(九大・理・生物科学)

第469回 12月6日(土) 鹿児島(鹿児島大学理学部)
(同時開催: インテンシブ理数教育特別プログラム・先端科学講演会、SSH 活動報告会)

共催: 鹿児島大学理学部

後援: 鹿児島県高等学校教育研究会理科部会

【高等学校における生物研究成果発表】

【ポスター発表】

「万之瀬川河口域におけるハンミョウ類の分布」 錦江湾高校(サイエンスクラブ) 中原悠大、中山和也(指導: 小溝克己)

「鰻池に生息するミナミヌマエビとスジエビの生態」 錦江湾高校(2年) 上蘭翔平(指導: 讃岐斉)

「愛宕川の貝類相」 錦江湾高校(2年) 山下佳樹(指導: 讃岐斉)

「イシマキガイとカワニナ類の遡上行動」 錦江湾高校(2年) 玉利大樹(指導: 讃岐斉)

「南九州市大浦川の貝類相」 錦江湾高校(1年) 後藤真依、沢津橋由香、下尾紗代、橋口綾香、有延龍志、上妻慶祐、今村昂(指導: 讃岐斉)

「いろいろなマメ科植物の根粒形態と窒素固定活性」 錦江湾高校(2年) 上蘭秀、今福優友、川路勇太、島子鉄平、松尾教平(指導: 下大田智子)

「海水分析とプランクトン相からみた鹿児島湾沿岸の環境」 国分高校(理数科) 田上真也、長井彩乃、松元美希、遠藤美穂、瀬戸口紗弥、徳永光希、濱川みな美(指導: 田中美智代、嶋田優一)

【口頭発表】

「オトシブミの寄生蜂に関する研究」 錦江湾高校(2年) 菅孔太朗、七村早智、野崎加愛那、岩坪鉄平、追立苑加、沖彩菜、樋高沙織(指導: 小溝克己)

「シダ植物の観察・研究~胞子体の成長に影響を与える要因・前葉体形成に影響を与える要因~」 市来農芸高校(2年) 田上真盛、福ヶ野勇樹(指導: 久保敏史郎)

【特別講演(先端科学講演)】

「遺伝子から作られるバイオ薬品~タンパク質とペプチドの話~」 伊東祐二(鹿児島大学工学部生体工学科)
第470回 12月20日(土) 長崎(長崎大学環境科学部)
「長崎市における草本植物のフロラと植生~帰化植物を中心として~」 * 石橋佑美・中西こずえ(長大・環境)
「諫早地域における里地草原のフロラと植生」 * 青山由布理・中西こずえ(長大・環境)

「長崎県における水田及び周辺雑草フロラの季節変化」 * 堀田智子・山口知子・中西こずえ(長大・環境)

「ハマオモト(ヒガンバナ科)の繁殖生態と群落」 * 三浦夏奈子・中西弘樹(長大・教育)

「大村湾の海草(海産種子植物)の分布と生態」 * 吉岡一也・中西弘樹(長大・教育)

「砂質干潟に生息する巻貝イボキサゴの幼生の輸送過程」 * 玉置昭夫(長大・水)・安形仁宏(長大・院・生産)・高原佑典(長大・水)・竹内清治(長大・水)・Sumit Mandal(長大・院・生産)・大橋智志(長崎県総合水試)
第471回 12月21日(日) 大分(大分大学旦野原キャンパス)

「別府市平田川におけるケイソウについて~ケイソウはどこまで強酸に耐えられるか~」 甲斐 愛、柴田桃子、井上貴博、蔭山亮、佐藤辰哉、姫野萌、岩崎知亮(大分舞鶴高校)

「高崎山のニホンザル」 栗田博之(大分市教育委員会文化財課)

「国東半島県立自然公園の自然植生」 須股博信(日本生態学会員)

(4) 役員選挙

会則および選挙規定に従い、2009・2010年度の地区会長および地区委員の選挙が行われました。開票は2008年12月22日九州大学生態科学研究室において、地区会長、地区委員、地区会幹事の立会いのもとに行われました。開票結果は地区会報55号に掲載しましたので省略します。

(5) 地区会報54、55号発行(2008年7月31日、12月31日)

お知らせ

1. 第30回(2010年)関東地区生態学関係修士論文発表会開催のお知らせ

恒例の生態学関係修士論文発表会が下記の通りに首都大学東京において開催されます。この発表会は、本年度修士課程を修了される大学院生に、その研究成果を発表する機会を提供するものです。この発表会では日本生態学会関東地区会の会員・非会員に拘らず発表できますので、ぜひとも広くご参加いただきたいと考えております。また、みなさまには周囲の大学院生への周知のお願いとともに、当日の御来聴を心よりお待ちしております。

主催: 生態学会関東地区会

日時: 2010年2月27日(土)

会場: 首都大学東京・国際交流会館

会場への案内:

京王相模原線 南大沢駅下車 徒歩8分(校門をはいつてから5分)

首都大へのアクセス

(<http://www.tmu.ac.jp/access.html>)

首都大の構内マップ

(http://www.tmu.ac.jp/university/campus_guide.html)

19番が国際交流会館です。校門脇に案内看板があります。

問い合わせ先: eco_kanto_director@hotmail.co.jp (2010

年関東地区生態学関係修士論文発表会事務)
代表：石塚（東大・農学生命科学）
会場運営：常木（首都大・理工学）

書評

「海の外来生物 人間によって攪乱された地球の海」日本プランクトン学会・日本ベントス学会編 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-01825-4 本体 3200 円（税別）

外来生物の問題を解決するためには、大きくわけて四つの対策が必要である。一つ目は外来種と在来種を識別するための分類学的情報の蓄積、二つ目は侵入を監視する体制、三つ目は駆除方法の構築と実践、そして四つ目は侵入を未然に防ぐための社会的なしくみ作りである。本書は海洋生態系、特に沿岸域における外来生物の問題について、その具体例を幅広い分類群について網羅しながら、これら四点の確立への道筋を示した書である。

今日、「外来生物」というキーワードは社会にようやく認知されてきた。しかし一般の多くの人々にとって、その理解は依然として断片的な段階にあるだろう。本書は、外来生物の問題を一般の人々に包括的に理解してもらうことこそが、この解決に重要だという視点に立って編集されている。その姿勢を端的に表しているのが、枕として書かれた1章の「海の外来生物 Q&A」である。外来生物問題について十分な知識を持たなくても、Q&A 形式の短いやりとりの文章を読むことで、その大枠をとらえることができる。「海の」となっているが、陸上・淡水域の外来生物に共通する項目も多く、この構成は大学の教養レベルの講義や一般向けのセミナーでも参考になるかもしれない。

2章からは、様々な分類群の侵入とその経路、影響といった具体例の紹介がされる。沿岸域で外来生物の侵入が起きた場合、いったいどのようなことが起きるのか。まず2章では象徴的なサンフランシスコ湾のケースを取り上げ、その悲惨な様相を紹介して読者に外来生物問題の重大性を印象づける。この章はサンフランシスコ州立大のキンメラー氏の寄稿であるが、長期的なプランクトン相のモニタリングのデータがあってこそ問題の構造が明らかになっていること、食物網という基本的な生態系のしくみを理解することが外来生物問題の理解には欠かせないこと、が本章からコンパクトに読み取れる。後半に取り上げられるバラスト水問題についてもこの章は重要な伏線となっている。以下、3章から章別に貝類、フジツボ類、カニ類、多毛類、ホヤ類、渦鞭毛藻類、カイアシ類、海藻類、魚類寄生虫（扁形動物単生類）、魚類の各分類群について、実際に日本の沿岸域に移入、または日本から海外に移出した種具体例を取り上げ、その移入経路や生態系に及ぼす影響が紹介される。海ゆえに専門家以外にはなじみのない生物もあるが、そのような分類群については冒頭で簡単な概説がなされる配慮がある。ここまで読むと、読者は海の外来生物に共通する問題点を自ずから見いだすだろう。それらの要点の整理を助けるべく、13～15章では海産外来生物の三つの主

な移入経路（バラスト水、船体付着、水産物導入）について、16・17章ではバラスト水の管理をめぐる条約整備と船に搭載される殺生物処理装置の開発の現状、18章では外来生物の侵入と拡散を阻止するために必要な法整備が解説される。特にバラスト水にまつわる三つの章は、このトピックの平易な総説としてはおそらく初めてのものであろう。これらを含む後章は今日の海洋生物研究者が持つべき基礎知識であり、必読箇所である。

前述したように、本書は研究者のみならず、広く一般に読まれることを意識して書かれているが、特に読んでほしいと思われる層は二つある。一つ目は、外来生物を研究対象の候補として考えたことがあるか、考えている人である。私の個人的なイメージではあるが、生態学会の会員の多くは外来生物研究をある種の応用科学としてとらえていないだろうか。とりわけ生態学を基礎科学の一翼を担う学問分野と考える人の中には、外来生物に関心を持っていたとしても、それを研究対象とすることには躊躇する向きもあるかもしれない。外来生物の存在は人為によるものなので、観測する対象面によっては自然界の普遍の理を見ていないことは確かである。しかし、本書で紹介された研究例とその成果を見れば、外来生物研究にも基礎科学としての生態学上興味深いテーマが数多く隠されている、ということがよくわかる。外来生物の移入経路を調べる目的で分子マーカーを使うことは今日一般的となったが、その過程で遺伝子レベルでの本来の生物地理分布やその多様性が明らかにされることも多い（例えば10章のワカメ、12章のスズキ類など）。また、外来生物の侵入前後に起きるドラスティックな群集の変化（2章など）は、（結果論として）一種の大規模な野外実験が行われたようなものであり、群集生態学にとって（言葉は良くないが）“魅力的”なデータである。木村妙子氏が投げかける「海の外来種を研究してみませんか」（p.48）というメッセージは、もちろん社会的なニーズに研究者が応えていくべきというのが本意ではあるが、基礎科学に軸足を置く生態学者が耳を傾けたとしても、決して損はないと思うのである。

もう一つの読まれるべき層とは、これは言わずもがなであるが、水産業、港湾業、海運業、行政、沿岸域をフィールドとして環境教育に携わる人など、何らかの形で海に関わって仕事をする人である。本書が提示する最も重要な主張は、海洋生物に接点を持つあらゆる人や業界がグローバルに連携しなければ、海の外来生物問題は決して解決に至らない、ということである。ニュージーランドにおける迅速な外来生物駆除体制のエピソード（10章）や、バラスト水規制に対するアメリカの厳しい姿勢（16章）を知ると、この点での日本の立ち遅れ観はやはり否めない。理想のレベルに追いつくには、まず国内の関係者の知識や意識の格差を解消することが第一歩となる。本書はこの課題を意識した編集方針が貫かれ、その溝を埋めるべく世に出されたものである。この点で欲を言えば、各章を読み解く上で欠かせない知識（特に分子生物学に関連する用語等）は、もう少し紙数を増やして丁寧に解説してもよかつたかもしれない（巻末に簡条書きで簡単な解説はある）。また、現場での同定に使える

ようにという配慮から、巻頭に日本で問題になっている（または今後なり得る）外来生物のカラー写真図版が掲載されているが、各種の識別点を図版ページに簡潔に併記すればなおよかつただろう。しかし、これらは些末な指摘であり、この点をもって本書のねらいが損なわれている訳では決してない。重要なのは、この一冊で海の外来生物の現状から問題点、そして解決への目標点を概観できる、という纏まりの良さとともに、良い意味での敷居の低さにある。この評をお読みの方で、もし上記のような分野・業界にお知り合いがいれば、ぜひお薦めいただければと切に思う。

本書は外来生物問題を何としても解決していきたい、という目的意識を持つ海洋生物研究者の連携によって生み出された。複数の学会の協同による編集という点も評価されるべきだろう。本書をモデルとして、他の分類群や環境域でも同様の書が続いてほしいと思う。

（石田 惣・大阪市立自然史博物館）



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 椿 宜高

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

共同利用委員会からのお知らせ

2010年度（平成22年度）京都大学生態学研究センターの 共同利用事業の公募時期について

京都大学生態学研究センターは、2010年度4月から6年間、文部科学省の「生態学・生物多様性科学の先端的共同利用・共同研究拠点」として認定されました。この拠点としての認定に伴って、センターではこれまでの共同利用事業公募のあり方を見直し、広く国内の関連研究者に向けて、生態学・生物多様性科学に関わる共同利用・共同企画を、これまで以上に魅力的な形で募集できるように準備を進めております。そのため、例年はこの時期にお知らせする公募要綱を今回は掲載できませんでした。

2010年度の公募につきましては、2010年4月以降のできるだけ早い時期に、センターのホームページへの掲載と関連するメーリングリスト等を通じて、関係者の皆様にご連絡させていただきます。

センター関係者の動き

- 1) 藤田 昇助教が、8月1日付けで准教授に昇任しました。
- 2) 2009年度外国人研究員（客員教授）として、アムステルダム大学（オランダ）の Mouringh Willem Sabelis 氏が9月15日から12月15日まで滞在されました。
- 3) 2009年度外国人研究員（客員教授）として、プールナプラジャナ科学研究所（インド）の Behera Narayan 氏が2009年12月16日から2010年3月31日まで滞在中です。
- 4) 2009年度外国人研究員として、ピエール&マリーキュリー大学（フランス）の Guillaume Achaz 氏が2009年12月29日から2010年8月23日まで滞在中です。

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。
新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。
下記会費（地区会費）を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：日本生態学会

退会する際は前年度内に退会届を事務局まで提出してください。
会費滞納2年で会誌の発送停止となり、3年で退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

		A 会員	B 会員	C 会員
配布 *	Ecological Research + 生態誌	○	○	
	保全誌		○	○
投稿 **	生態誌	○	○	
	保全誌	○	○	○
大会発表	全セッション	○	○	
	自由集会	○	○	○
総会・委員 (選挙・被選挙権)		○	○	○
年会費	正会員	11,000	13,000	5,000
	学生会員	8,000	10,000	2,500
	団体会員	20,000	22,000	14,000

*Ecological Research および生態誌については2007年度より冊子を必要としない会員への割引（ER 900円、生態誌 600円）を開始しました。すでに会員の方が今後申請される場合は2011年度以降の適用となります。新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年度より適用されます。

**Ecological Research への投稿権利は従来通り会員に限定しません。

地区会費（正・学生会員のみ）

北海道地区：200円 東北地区：800円 関東地区：600円 中部地区：0円
近畿地区：400円 中国・四国地区：400円 九州地区：700円

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8

Tel&Fax 075-384-0250 E-mail kaiin@mail.esj.ne.jp